

内地

思ひ出の悲喜交々

京都府 矢野 美三雄

任地到着まで

地球温暖化に伴い、日本列島も亜熱帯に入ったと聞
が、決して喜ばしいことではない。それも日本の建築
様式（温帯地向き）があまりにも閉鎖的で寒冷地向き
に設計し建てられているからである。

私が昭和十七年（一九四二）三月初旬にフィリピン
のダバオに第一歩をしるした時を思ひ出すのである
が、緑に満ち映えた山、それに強烈な太陽光線を受け
て旺盛な同化作用によって樹木は繁茂し、世界有数の

深海のフィリピン海溝にたたえた海水は黒味さえおび
ている。その深さは四キロと聞く。誠に珍しく見るも
の聞くもの驚異の連続であった。

しかし、フィリピンは、今日では発展途上国とおだ
てあげられているが、かつてスペインの被征服国とな
り、後には米国に属し、幾多の苦難を経ってきたが、そ
の生活の知恵は大したものであると思う。

道路は舗装されて埃はたたず、その両サイドは大き
な高木で自然のアーチをなし、人間にやさしい緑陰を
作っている。それに毎日かならずスコールが訪れ、人
間をはじめ生物に水分の涼しさを与えてくれる自然の
恩恵は有り難いものであると思われた。

私は、昭和九（一九三四）年海軍工廠へ就職し、昭
和十六年十二月八日、日本は国力もないのにあつかま

しくもABC包囲線から逃れんとして太平洋戦争に突入したのであるが、当時「よらしむべし、知らしむべからず」の軍方針に盲従し、昭和十七年二月二十五日、海軍軍属として勇躍征途につき、前記のフィリピンが私の戦地での初めての上陸地であるので特に印象に残っている。

二月二十五日、呉軍港にて海軍徴備船「東京丸」（六四七一トン）に海軍経理部軍需部、工作部、病院等要員数百人が乗船したのである。私は当時、海軍の軍属の下層の雇員で軍人であれば兵相当であった。

徴備船といっても指揮官兼分隊長は退役の海軍大佐で、分隊長は兵曹長、下士官、兵十人、武力・軍備は船首、船尾に木製の偽装砲二門、昔の軍歌に「輜重しちゆう、輸卒が兵隊ならば、トンボ蝶々も鳥のうち」とあったが、これでも大切な軍事要員を運ぶ軍船かとおかしくもあり、悲しくもあった。

便乗者は士官高等文官を最も涼しい特等室に入れ、扇風機付であった。下士官や判任文官は船底であった

が、それでも居住区は大変にゆったりしていた。

私たち雇員は待遇最悪で囚人の雑居房であった。夜は蒸風呂のようでとても寝られなく、船上のデッキに毛布を敷き寝た。食事は米飯で三度三度貯蔵（氷漬可能な）がきき、しかも捨てる内臓も少ない魚「カワハギ」が副食であった。有り難いことに経理部は、艦隊酒保という役得のある立場で、ビールのただ飲みをたら腹した。

現今、日本の経済は低迷しているが、ぜいたく丈は中流意識で、リストラや倒産で生活は苦しいにもかかわらず、質素で自給自足に戻すこともなく、戦中の「撃ちてし止まん」「鬼畜米英」「欲しがりません勝つまでは」の気持は毛頭ない。当時は明治維新からの「富国強兵」の国策の延長であったから、すべて軍優先が当然だったのである。

船中に押し込められていた輸送船の便乗者も、前記フィリピンが最初の上陸地であった。私たち陸上動物にとって最も渴望するのは上陸であった。

軍の華やかであったその頃は、統制上やむを得ないが階級意識は高く、上陸は士官・高等文官が第一で、三日目くらいが私等であった。

日本軍は、昭和十六年十二月二十日にダバオを占領した。当時、戦火今ださめず、陸戦隊の話では残敵の逆襲もあるという。棧橋も港も完全に破壊され、哀れにも邦人が原住民に虐殺されたりした。

昭和十七年初頭であれば、日本は攻勢の時で、身の程知らぬ海軍も連合艦隊司令官山本大将が、天皇陛下の御下問に対して「半年か一年くらいでけりがつくのであれば連合国を相手に戦いましょう」とお答えしたと聞いている。その山本元帥も、末路は前線への軍用機上で昭和十八年四月十八日壮烈な戦死であったとなつているが、事實は責任をとつての自決であつたと聞く。

機密の暗号も米軍へ筒抜けで解読され、戦場視察と
いうのにわずか六機の戦闘機援護では、あまりにも早
計で冒険であると素人でも考えるであろう。敵は十八
機で攻撃してきたという。

私等の軍徴用船の輸送船は護衛艦も航空機の援護・警戒もなく、まさに大海をさまよう小船の状況で、敵の攻撃をさけつつの「之字航海」であった。直線で行けば当時の船足でも五日もあれば任地バリックパバンに着けるであろうに。

それにスラバヤ沖の海戦も勝利とならず、スラバヤ占領待ちでマカッサルへ上陸した。

海軍の作業庁に育ち、経理部に転雇され、身分も工員から雇員に昇格したとはいえ、海軍の部隊並みの生活は初めてで、マカッサルでは、いかめしい経理部支部長の朝は課業整列、夜は巡検があつた。私どもは仮入部で何等することなく、昼間は専ら見物であり、時には涼を求めてプールで泳いだ。

スラバヤが陥落したので「興安丸」で二日かかって最終任地バリックパバンに着いた。開庁は三月二十七日で出発以来丸々三十二日、一カ月あまりかかった任地着であつた。

油の基地である軍都としての経費や、軍人軍属の給

与の支払いと艦船部隊各庁の会計監査という使命を達成するため、第二百二海軍経理部パリックパパン支部も設置されたのである。

私は海軍工廠出身であるため、経理部支部長の命により呉海軍工廠砲煩部から砲台建設に派遣されて来た技術科士官や工員による工事の工費や材料費の予算・決算事務をうけたまわった。そのため法規の研究をし、計算事務をしようとしていた矢先、敵の来攻により中止となった。

楽園のような戦地

私の勤務した経理部は、海軍の会計経理の元締であり、またソフト面では艦隊酒保から喫茶店経営まで任務は多角であった。

陸軍は野戦で食糧調達することとなっていたようだが、海軍は板子一枚下は地獄であるから、せめて食事は美味で楽しくと主計科が置かれた。経理部は軍資金、物資共に十分であった。今から思えば二重取りが公然と行われていた。

すなわち官の施設へ無料で入居しながら宿舍手当てを、食事は軍属の優秀な割烹が調理している官舎住まいであるのに食料費も受けていた。毎日毎夜、ごちそう三昧でビールも十分に飲んで誠に楽天地であった。

私は雇員の先任であったので、士官食堂で経理部支部長である主計中佐の食事の末席での相伴をさせられた。

三度三度新鮮な野菜に高級な魚介料理、時には郷土を思わず寿司も出た。

二代経理部支部長作の経理部小唄に

ここは経理部、向は港運（大和港運？）

中を取り持つ常盤通り

アリヤヨイシヨヨイシヨ

南経涼風は八重潮健児

集い蹴ふりや意気と熱

アリヤヨイシヨヨイシヨ

男理事生に交りて咲いた

サヤの心はジャワ桜

アリヤヨイシヨヨイシヨ

五寮の岸に打ちよす波は

遠い祖国の子守歌

アリヤヨイシヨヨイシヨ

とあったが、まさに的を射た名小唄で、私達はビールが入り御機嫌になると、この小唄を口にしたものである。

海軍は昔から酒飲み天国で、月に二回や三回は全員での酒盛りが盛大にあった。かくし芸の郷土民謡、上品な尺八、ギター演奏、ものまね、漫談など面白かったものである。

勤務も大変に楽しく、朝六時当直の「総員起し」に始まり、それも戦勝国気分で、日本時間に合わせたので一時間も遅く楽であった。八時から課業につき熱帯の習慣である午睡もあった。

軍属であるため外出も比較的自由で、直営の縫製工場場で防暑服を安価で作って散歩し、現地人レストラン

で珍しい料理や菓物を賞味した。

経理部は戦地とはいえ役所であったので、昭和十九年一月十五日、当時の言葉で言えば「南進女性」が三人、経理部スラバヤ本部から「神威」に便乗、転勤して来た。

さらに同年五月には二人加わり、計五人のうら若い女性が増え、殺伐な男の世界も潤いを見せてきた。けれど戦局は不利となり、苛烈を極めて来た昭和十九年九月三十日、病院船「氷川丸」で内地へ引き揚げとなってしまった。この女性達とはわずか八カ月の暮しであった。

そこは男女の仲、若い男子理事生との間にほのかな恋の芽生えもあったと聞くが、満開にもならず、もとより散らすこともなく悲しい別れとなった。

日本の国内外、第一線、銃後を通じて、勝つために戦ったのは前述の通りであるが、昭和十八年三月には名歌手・藤山一郎の慰問団が来島し、戦闘の一時を忘

れさせてくれた。

さらに九月に女性芸能人・森光子、天中軒月子ほか多数の慰問団の来演があった。

恐ろしかった空襲

戦地でのんびりとぬるま湯につかっていた私等も、いつまでもそうはいかなかった。昭和十八年八月十三日、ついに最も危険な、生まれて初めての空襲を受けた。

バリック占領当時は一、二の敵機の反撃的な攻撃はあったが、その後は連合軍の基地後退により安全を保たれていたようであった。それでも時々には敵機動艦隊の来襲の警報が入り、「第二警戒配備につけ！」の連呼で上陸員も帰隊したのである。

八月猛暑の夜中当直員の「敵襲！」の声で、一同状況不明のままバジヤマ姿で宿舍前の敵が作った壕へ、先を争って飛び込んだ。

空襲の恐ろしさや爆弾の威力も知らぬ長袖の軍属の私等は、壕の外へ出て、防空砲台から撃ち上げる砲火

の美しさに両国の花火もかくやと見ていた。

朝の課業整列に際して経理部支部長より「空襲時には絶対に壕の外に出るな。鍋の破片のような味方の砲弾のかけらで犬死にするな」と厳しく訓示された。同時に当直員の迅速で適切な連呼通報もほめられた。

その後数回の少数機の夜間空襲があり多少の被害が出たが、本格的な大規模空襲は昭和十九年九月三十日から始まったB 24七十二機による大空襲である。舗装された道路上へ落下する何トン爆弾が知らぬが、そこからはまたたく間に水が湧き出た。

バリックバパンの湾内には翌一日出航する病院船「水川丸」に退庁帰国する女子理事生五人が便乗していたが、くつきりと表示されていた「赤十字」マークで攻撃も受けることなく安全であった。

私たち経理部の職員は、支部長以下庁舎前の防空壕へ避難し、爆風によって壕壁の土砂がバラバラと落ちるのを聞き、目と耳を押さえて眼球の飛び出しや鼓膜の破れを防いだ。時には今日は駄目かと観念すること

もあり、まさに生命は風前の灯であった。

なおこの空襲でいつまでも記憶に残る悲しむべきことは、私の最愛の慈母が故国で、暑さの去らぬ田の畔で心臓衰弱で死亡したことである。まさに増産報国の農業女戦士として、農民としての戦死であった。

この悲しい出来事は、私が昭和二十一年六月三日、内地へ復員して初めて知ったのであるが、それから数えて五十四年経ったが、母は愛しの子の身代わりになったのであると、私は思っている。

その後、十月三日に第二回目、十日にB 24一〇七機、P 38十一機、B 47十六機、引き続き十四日にはB 24九十八機などの空襲があり、そして十八日と続き、後は散発となった。また神経戦的な空襲は定期便で、毎日毎夜あった。

これらの空襲により燃料廠が相当な被害を受けたが、わが軍の飛行場を飛び立った「雷電」「零戦」「月光」が敵にも多少の打撃を与えた。

上陸交戦より終戦まで

昭和二十年六月十五日、ついに運命の日が訪れた。

昭和十九年九月三十日の大空襲以後、十月に入ると大空襲は回をかさねた。得意の絨毯爆撃であった。

敵の戦法は、近代戦の花形である飛行機で日本軍を完膚なきまでに翻弄し、もう大丈夫という所で上陸用舟艇によって上陸をするという、橋頭堡を確保してからの上陸という用心深いものであった。

その例はミッドウェー海戦の敗北以来、キスカ作戦、サイパン玉砕、硫黄島、沖繩と、太平洋の島々を総なめにして来たのであるから、私等も今日は人の身、明日は我が身と薄氷を踏む思いであった。そして昭和十八年頃になると「敵の謀略に惑わされる事なきように」と敵しく戒められていた。

私等は秘かにラジオのニューデリー放送を盗聴し、「東條総理は天皇陛下にうそを申し上げ、云々」というニュースに迷ったものだ。

それでも最後は「神州日本は神風により敵軍を降伏させる」と幼稚にも信じ、今に連合艦隊がバリックパン救援に来ると話し合っていた。

また、油なくして何の戦争ぞ、原動力の油を生産しているこの都を海軍が見捨ててるものかと、天佑神助を切に祈っていた。

在バリックパパンの各隊・各庁は、第二南遣艦隊の第二警備部隊と称され、海軍最高指揮官は第二十二特根司令官・鎌因道章海軍中将であった。

連合軍は巡洋艦を旗艦に三十数隻に分乗した豪軍第七師団約三万人が、無人の野を進むように進攻して来たのである。

膂へその緒を切ってから初めて体験する艦砲射撃は、ズンズンと腹にこたえた。この艦砲射撃では砲煙はすぐ見えるが、その砲音は二秒ほどたってから聞こえ、身の毛がよだち、誰の顔もみな青ざめて生きた心地がしなかった。経理部は武器を持たぬ非戦闘員の集まりであるので、この平和な空気を打ち破った強烈な体験に、特に心細い気持ち体が張ったのである。

こんな時はなんととっても上司の士官が部下の常握と安堵感を与える一挙一動、一言一句をみな信頼する

ものである。司令部から帰って来た某主計大尉は真赤な顔をしてやや震え声で口を開いた。

「たった今、司令部から通知があり、第四砲台が敵艦三十数隻を沖合に発見したとのこと。同時に、『千早二号作戦』が発動された。諸君はただちに所定の行動に移り、まず書類を焼却せよ。諸君の武運長久を祈る」と。この「千早二号作戦」とは大楠公の戦略に習った引き下がり戦法で、ボルネオの奥地に悠久に流れる大河マハカムに沿い転進するもので、戦も長期が予想された。

昭和十七年末、約三年二カ月あまり、この楽園天国（空襲はあっても）はいよいよ終わりか、これは夢か幻覚であってくればよいがと心の奥で願っていた。しかし現実は厳しく、まさに上陸作戦の渦に巻き込まれ、これから先の、猛獣や毒蛇の住む魔のジャングルへの逃避行を思い、恐怖で憂うつになった。

いつまでも感傷に浸っているわけにはいかない。急いで昼食を済まし、今までは二時間の昼寝時間があっ

たがそれどころではなく、急いで書類焼却作業に加わった。庁舎の東側は広い空き地になっている。ここは今までは課業整列や国旗掲揚宣誓をやり、侍従武官の御差遣をお迎えしたなつかしい広場であるが、そこに長さ三メートル幅二メートル深さ一メートル程度の穴を掘るのである。赤道直下の午後三時といえぱじつとしていた犬でも汗が吹き出して来る。この炎天下の勞働となれば灼熱の太陽の直射で頭がくらくらする。

穴掘作業は全員の協力により一時間ほどで完了し、そこへ書類を投げ込み焼却するのだが、紙というものは束にして燃やすとなかなか燃えない。手早くばらして数枚ずつ投げ込むが延々として終わらない。燃えている紙から発生する上昇気流で投げ込んだ紙はひらひらと舞い上がる。燃えている紙の量が多ければ多いほど後の作業は困難となる。太陽熱と同時に吹き上げる焼却熱も加わり作業員は大変であった。灼熱地獄とはこのことかと思つた。しかもこの焼却作業は日没前に終了しなければならぬ。日が暮れて炎が残っていると沖合いの敵艦から艦砲射撃を受けることは必至である。

る。

軍務部から供用貸与の「軍機」「軍極秘」の図書も人事関係の書類を除き大半が処分された。私が担当していた経費や給与の諸帳簿も燃やされた。

私は昭和十七年以來の「私本 戦時日誌」を丹念につけ、自分なりに爆撃による被害状況を記入し、それに日々の生活状況から勤務の状態、楽しい余暇のことなどそれこそ細大もらさず書き留めていた。また内地から持参した日本歴史の文献や趣味の文藝書物などが数多くあったが、これも致し方なく始末したが、特に「私本 戦時日誌」は良い記録文学の資料であったのに返すがえすも残念である。

六月十五日夜は疲れてはいたが爆撃や艦砲射撃であまり眠れず、十六日朝となる。さあ転進だ。

經理部のトラックに各自マットを積み、背負袋に着がえや食料薬品若干を入れ、腰には内地から持参の昭和刀と、役得で優先的に入手した立派な軍刀を二振も差し、手には燃料廠製の短穂やりを下げ、妙な贅沢な

戦国時代を思わす落武者姿の一行であった。

パリック・パンから奥地サマリンドへの道を東海道に見立て、沼津や小田原と名付けていた。私は主計隊給与班で隊長は主計大尉で、上役の書記と苦力に軍票を荷負わせて落ちていった。

途中でバシャンバシャンという異音を聞いた。施設隊が波板を運んで投げ下ろしている音と思ったのに、あにはからんや機銃掃射の音であった。

大木をぐるぐる回り掃射をさけたり、山ヒルに吸われつつ水浴をしたり、連絡の道路上で敵機に襲われ谷間へ転げ込んだり、蝸壺へ逃げ込んだが、敵機は旋回三十回でバリバリ掃射がきた。私が狙われたのでなく、近くの苦力小屋がやられ多くの死者が出た。

道々、施設隊が設営してくれた小屋で一夜の宿をとった。豪雨に見舞われずぬれになったこともあった。

ビタミン不足で足がはれてだるく困った時に、上官の主計大佐に、草の葉をもみ藻草を作り灸をせよと教わったり、下痢症状でアメーバ赤痢と観念した時には

老衛生大尉に「空襲の間には努めて日光浴をせよ」と指導され、全快したのも嬉しいことであった。

戦友の製糧士は炊所で作業中、わずかな炎の光で艦砲射撃を受け、肉塊を遣しただけで経理部の戦死第一号となった。内地には妻子が無事帰国を待っていたのに哀れなことであった。別の戦友は不治の病にかかったことをはかなんで自決した。

主計隊であるので食糧の握り飯を作り、それを決死隊が第一線へ運ばなければならなかった。若い戦友に危険な役が当たりしうしう行くのを見送った。先年、同君を故郷に訪ね、当時の状況から致し方なかったことだと詫びたものです。

主計隊は先々に糧食集積所を設け、腹がへっては戦は出来ぬことわざ通り、常に食べ物の充足を完全にしていた。当時内地では食糧事情が悪く、とても口に入らぬ貝柱やカニの缶詰など随分見受けた。

道路の開けている所は消防自動車にすがりつき、ふり落されぬよう注意して撤退した。

ボルネオ新聞（大朝系）は防空壕の中に石油輪転機を据え戦況報道をしていたが、昔のかわら版程度のものであった。その間、上陸軍を満載したトラックを揚陸機雷で爆破し、四十人ほどやっつけたとの戦果などを聞き鳴さいもした。八月十七日、サマリンド近くで終戦の詔書を拝聴し、やれやれ命拾いをしたと思つた。

戦々恐々の首実験

俘虜収容所へ入ってから命令が出た。「ロアバコンから来た日本人は全員道路へ出て二列横隊に整列せよ」と。経理部全員は何ごとかと訝りながら高床造りの階段を駆け下り道路へ出た。周囲の宿舎から約百人の日本人が出た。全員二列横隊に命ぜられた通り並んだ。首実験だ。

私等経理部の連中はバリックパバンから来た言わば「よそ者」であるから、この地域の原住民に顔見知りはない。だが他部隊の面々の中には、このサマリンド地区に戦時中から住む者も多数いる。

以前に原住民に暴力を振るつた者など、身に覚えのある者は決まって後列に並ぶ。ある者はメガネを外し、あるいは他人のメガネを借りるなどして出来るだけ人相を変える涙ぐましい努力をしている。

私等は潔白なので悠然と前列に並ぶ。昼の太陽が照りつけ頭がくらくらする。

サマリンド方向から乗用車とオランダ軍と原住民兵を乗せたトラックがインドネシアライア（歌）を合唱しつつ進行して来た。最初はバリックパバンから来るとの情報もあり冷や汗をかき心配もしていたが、誤報であった。

乗用車から中年のサロン姿の女性一人と子供二人がゆっくりと歩いて来たが、兵隊は護衛のように彼女等の後に続く。重苦しい空気が流れる。小柄なその女は腰を屈め、隊列の右端から日本人の顔を次々と下からのぞき込む。私は十番目くらいの前列に立ち女を迎える。百人からの日本人が沈黙したままその女の行動を目で追う。

その女は強い日本男性の圧迫感を受けているはず

だ。私も海軍のことであり、軍属でもこれまで何回となく閲兵を受けたが、この首実験ほど恐ろしく、無事パスを祈ったことはなかった。

突然男の子が「イニトアン（この旦那）」と指さしたが母親は確認したうえで「テダレ（違う）」と否定し過ぎた。この日本人は、同じような顔の集まりで同じ色の黒さ同じ服装であるからあわや危機一髪間違われかけたのである。けれど二人ほどが気の毒にも指名されてトラックに乗せられ蘭軍に引き渡された。首実験で選別され、「良」はスリリンキャンプへ「悪」はブラックキャンプへ収容となった。

あれは戦犯者

記録によると今次大戦の戦犯刑死者九一人、自決者一五一人とあるが、これらは犯罪者とは考えられないばかりか、むしろ進んで困難に殉じた英霊として靖国神社に合祀されている。

パリックパンでも特別警察隊民政部警察署軍法会議がいち早く戦犯摘発の目標となった。八字ひげの特

進少佐・吉村特警隊長はその責任と前途をはかなみ蚊帳の吊り手で自殺した。

軍法会議首席検察官・河合法務大尉も若干二十何歳かで吉村少佐と同じ方法で命を絶った。ロアバコンに抑留中の高松主計少佐は、敵上陸交戦中に軍命令を行う義務もない主計科士官が階級が上位であるため野戦の大隊長を命ぜられ、これがスパイ容疑の原住民の婦女子を多く虐殺し、廃坑へ死体を棄てた事件の責任をとられ、前途ある身が銃殺刑に処せられたのは気の毒であった。やがて拘引され処刑されると予想され少佐の憂愁に満ちた顔を見かけたが哀れであった。

戦争犠牲者に感謝

第二次世界大戦が終結してからはや五十五年、まさに「光陰矢の如し」で、私も老骨八十四歳となり「人生は白駒の隙を過ぐるが如し」の実感である。

今次大戦にて最後の戦場となった油の都パリックパンの悲惨な戦いの中で多くの戦友が散華し、また戦傷に加えて飢餓や脚気、マラリア、アメーバ赤痢など

の病で不帰の客となった。

山中転進の道中で旧知の下士官(尺八の名手の雅人)が路傍に高熱で倒れ、一すくいの水を求められたが、私もこれから先幾山河、自分の命水を与えることも出来ず、後から救援隊がやって来るからと納得させ、その場を去ったが、今思えば不人情なことをやったものだと思われるも仕方ない。

聞くとところによると、当時バリックパバンで戦った根拠地隊、燃料廠港務部施設隊、生産隊、航空隊や経理部の生存者は約千二百人であるとのこと。

しかし犠牲となった戦友や、戦禍に巻き込まれて身内も家も失ったアジアの国の人々も尊い人柱となった。欧米の四百年に及ぶ植民地支配を打破し、インドネシアの独立をはじめアジア諸国の躍進を見たのも、この解放戦争の余徳と思ひ、末長く平和を維持し榮えて行くことが大切であると思ふものである。

戦時を生きた女ひとり

京都府 新宮 美恵子

スーパーの買物を終え、日差し暑い外へ出た時、にわかには鳴りひびくサイレンの音。ハッと気が付き、ああ、今日は終戦の日だったのだ、とうかつさを申し訳なく思ひ、その場に立ち黙禱を始める。

目を閉じている間、あの当時住んでいた神戸の街の戦時下の光景が、少しずつ色濃く身に迫るように脳裏によみがえってくる。日本は絶対に勝つのだ、勝つまではどんなにしても頑張らねば、と若かった私が固く思つた気持ちの裏に、戦況は徐々に不利に傾き、敗戦の色が濃くなっていく不安、そして肉親のいないわが身の心細さ、生活の苦しさ心がさいなむ。

その極限に達した頃ついに戦争は終わり、私の身上に百八十度転換の宿命が待っていて、今、私はこの町にこうして生き長らえ、ここに立っている、とここ